



説界が詩の世界ほどの量的賑わいではないにしろ、多様性と質において、また詩とファンタジーとの間をさまようような形式上の（デーブ・ゴッドフリーらに見られる声高のナシヨナリズムや、無政府主義的な社会批判もいくらか加えた）実験的試みにおいて、はかりしれぬ程豊かになっているのがわかる。あるいはカナダに十五年間暮し、未だにその影響の尾を引いているマルコム・ローリーも忘れてはならない存在だろう。ローリーはカナダにいる



アトウッド「浮上」

間に「火山のふもとで」の最終稿を書き、バンクーバーに近い美しい生活環境に触発された多くの著作を残した。没後に出版された短編集「神よ、汝の住みし天より我等の声を聞き給え」、（一九六一年）、長編小説「ガブリアオラへ行く十月の連絡船」（一九七〇年）などがそれである。

戯

曲の分野に目を転じると、その創作は実際に上演されるかどうかというところが大きな制約条件になった。一九六〇年代になるまでロバートソン・デービスなどの少数の例外を除けば、舞台劇

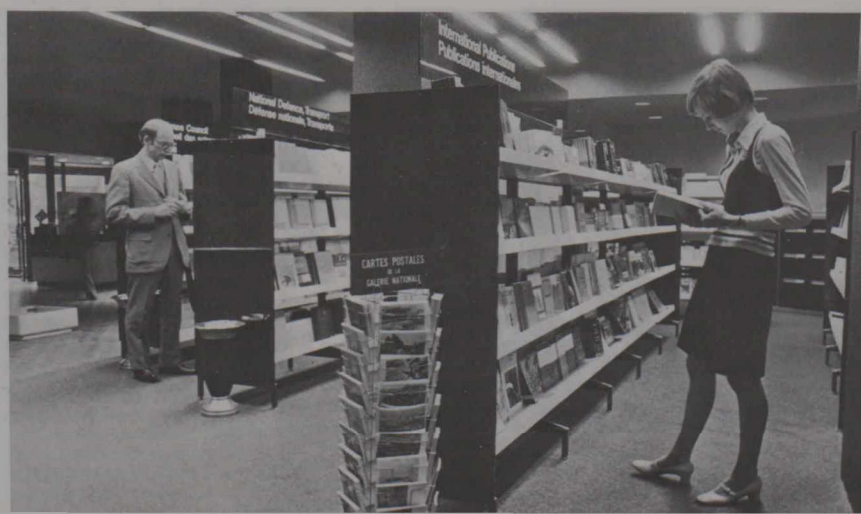
の戯曲はほとんど書かれなかった。戯曲の創作活動が続けてこられたのは、CBC（カナダ放送協会）がラジオ劇の脚本を依頼したからである。何千本ものラジオドラマ脚本が書かれているが、本になったのはほんの少数である。

一方、劇場の数は一九五〇年代頃から非常に増えてきたが、劇作家はラジオドラマからの方向転換に慎重であり、劇場監督もまた、ヨーロッパの古典劇や近代劇に需要があることに満足して、カナダ作家のものをあえてとり入れようとはしなかった。しかしそうした状況も、近年になって変わりつつあり、特にカナダ・カウンシル（カナダ文化振興会）が財政的・精神的援助を与えるようになってからは、実験的な小劇場が全国各地に見られるようになった。これによって英系カナダでは、興味ある劇作家が多数生まれている。主な劇作家の一人に、詩人のジュームズ・リーニーがいる。リーニーは最近、それまでの叙情詩をやめてほぼ完全に実験的な詩劇（「暗闇の中の色」、一九六七年など）やオペラ（「夜に花開くサボテン」、一九六二年など）に転向した。そのほか、ここ二〇年の間にカナダの演劇界に功のあつた劇作家には、ジョン・コールター（「ルイ・リエルの裁判」、一九六七年）、シャロン・ポロック（「ウォルシュ」、一九七三年）、キャロル・ホルト（「パッファロー・ジャンプ」、一九七二年）、ジョージ・ライガ（「リタ・ジョーの恍惚」、一九六七年）、デービッド・フリーマン（「クリープ」、一九七二年）、ジョン・ハーバート（「幸運と人の眼」、一九六七年に国際的好評を得た）らがい

る。ラジオ・ドラマの方は、すでにCBCの後援がなくなったのが大きな原因となって、衰退の方向を辿っている。テレビ・ドラマは、ついで興味ある形式として発展しなかった。

最

後に残された文学ジャンルとして、文学批評について述べねばなるまい。文学批評は、文学の発展には欠かせないがカナダでは一九四〇年代までほとんど存在しなかったといつてよい。一九二八年に詩人のA・J・M・スミスは「カナディアン・フォーラム」に有名なエッセイを発表した。「求む——カナダ文学批評」という題のついたそのエッセイの中で、スミスは当時行われていた書評を皮相的だとして手厳しく非難し、「芸術家の基本的な位置を見きわめる」ような哲学的な批評を要求した。それに対し、彼の友人で詩人仲間のF・R・スコットが、それは春先に収穫を望むようなものだと非難したが、まさにスコットの言う通り真剣な文学批評が多少なりともカナダの土壌に育ちはじめるまでには、詩人ならばに小説家たちによってさらに多くの作品が生み出されなければならなかったのである。一九四三年は重要な意味をもつ。その年、E・K・ブラウンが深遠な研究



の成果「カナダの詩について」を出版し、A・J・M・スミスも「カナダの詩」を出した。スミスの本に収録されたものを見ると、これが単なる詩集にとどまらないことがわかる。詩を選択する原理、またすぐれた評論および文学史となっている序論部分において、カナダの文学が辿っている幾つかの流れを明らかにし、文学の評価基準を示したものである。

一九三六年、「トロント大学クォーターリー」に、その年のあらゆる文学ジャンルで発表された作品を載せた、年一回の「カナダの文学」という欄が登場した。この文学時評は、詩の項目をノースロップ・フライが担当しはじめた一九五〇年代初め頃から、大きな影響力を持ちはじめた。